

# これぞ老舗 ~やまがたに息づく

355

樹木粉碎機を説明する高橋尚成社長(左)。果樹農家から造園業者、学校、自治体まで幅広く採用されている  
=山形市鉄物町・カルイ本社(撮影・色摩高幸)



「自己満足ではいけない。ものづくりに終わりはない」



本社入り口付近に掲げられている2代目社長の肖像画と、昭和20年代の水冷式発動機。左は高橋社長の弟で執行役員営業部長の高橋尚孝氏



ポンプをチェックする社員

利用者の声に、常に耳を傾けてきた。例えばチップの粒度を変えるスクリーンをフットタッチで脱着できるようにするなど、利用者の要望から生まれた機能は少なくない。毎年、何かしらの変更を加えるのは、「自己満足ではない」という意味だ。「ボルト一つの意味を考えるくらい理詰めで仕事をしたい。それがいい仕事、そして利用者・取引先が期待する以上の成果につながるはずだ。高橋社長はものづくりへの思いをこう語った。

1918(大正7年)年に開発した空冷式石油発動機の第1号

経営理念「喜勵」  
先代からの経営理念「喜勵」を受け継ぐ。受動的ではなく、能動的に自ら考え仕事をしようとして利用者・取引先が期待する以上の成果につながるはずだ。高橋社長はものづくりへの思いをこう語った。

## カルイ [山形]

山形市鉄物町の西部工業団地に本社工場を構える樹木粉碎機・ポンプメーカーのカルイ(高橋尚成社長)。整然とした工場で最新の切削機械を使った部品の削り出しや組み立て、ポンプの塗装作業が行われていた。「それでもお客様は満足するか?」。社員の出入口に掲げられた言葉は、顧客の利便性を第一に考え、品質を追求してきた企業姿勢を表している。

創業の地は愛媛県の伊予三島(現四国中央市)。高橋家は江戸時代から鐵砲鍛冶を営む家系だった親戚の高橋策太郎を技術者に迎えて輸入石油発動機研究し、18年に空冷式石油発動機を完成させた。

21年には、水冷式石油発動機が農商務省主催の農業用石油発動機比較審査で最高位入選を果たす。外国製、日本製の中でも重量が「軽い」ことから、製品を「カルイ式石油発動機」と命名した。これが現社名の由来となっている。カルイ式は製造が追い付かないほど評判を集め、その後も国際審査会で最高位入選を果たし、30(昭和5)

京・板橋に決まりかけたが、山形県から好条件が提示され、専門性と2代目の「律」は山形行きを決断する。

高橋製作所は「山形発動機」として39年、現在の山形市鉄砲町2丁目で再スタートを切った。本県の企業誘致第1号だったという。伊予三島から多くの社員と家族が移り住んだ。「その数は50~100世帯に上った

高圧ポンプに着目した。当時、海外製のスプリンクラーやレンガが広まっており、水を送るために必要な製品だったからだ。64年に「キャナルポンプ」を世に送り出すと、10年間で販売台数30万台を達成。ポンプは

1916(大正5)年 高橋尚平が愛媛県の伊予三島で高橋製作所を設立  
1918(大正7)年 空冷式石油発動機が完成  
1921(大正10)年 農商務省主催の第1回農業用石油発動機比較試験で最高位入選。「カルイ式石油発動機」と命名

トと地図を片手に全国を回り、樹木粉碎機を売り込んだ。カタログだけでは商品の魅力が伝わらないと、各地で実演を繰り返した。露出を高めるため業界紙に広告を出し、問い合わせがあれば飛んで行った。現在は無料動画サイトなどを活用し、性能をアピール。同社の粉碎機は農家だけでなく、造園業者や大学、自治体などにも導入されている。

### 創業からの歴史

# 樹木粉碎機、独自に開発

だつた。高橋社長の曾祖父に当たる高橋尚平は鍛や鋤などの農機具を作り始め、1916(大正5)年に高橋製作所を設立した。子どもの頃から機械が得意だった親戚の高橋策太郎を技術者に迎えて輸入石油発動機研究し、18年に空冷式石油発動機を完成させた。

21年には、水冷式石油発動機が農商務省主催の農業用石油発動機比較審査で最高位入選を果たす。外国製、日本製の中でも重量が「軽い」ことから、製品を「カルイ式石油発動機」と命名した。これが現社名の由来となっている。カルイ式は製造が追い付かないほど評判を集め、その後も国際審査会で最高位入選を果たし、30(昭和5)

と聞いている」と高橋社長。だが、雪国の気候や食べ物が合わなかったのか、2年もしないうちにほとんどが四国に戻ってしまった。

戦時には、海軍や陸軍の管理工場として稼働した。昭和30年ごろになると発動機を載せた耕運機などが普及し、発動機単体での商売は難しくなっていた。工場として稼働した。昭和30年ごろになると発動機を載せた耕運機などが普及し、発動機単体の結果、75年に日本初の樹木粉碎機が誕生、77年に「カルイチスター」の販売を始めた。

海外の農機具店を訪れた際にある機械が目に留まった。日本には無い樹木粉碎機だつた。山形は果樹県で、多くの剪定枝が出る。粉碎して肥料に利用できるのではないか。試行錯誤の結果、75年に日本初の樹木粉碎機が誕生、77年に「カルイチ

スター」の販売を始めた。が、雪国の気候や食べ物が合わなかつたのか、2年もしないうちにほとんどが四国に戻つてしまつた。

現在も事業の柱となっている。ヒットしたポンプだが、雨が多いと売れないという気候リスクも抱えていた。エンジン搭載型ポンプには大手企業も進出していった。元銀行員で「技術はなかったが、アイデアマン」(高橋社長)の孝始さんは次の一手を考えていた。

海外の農機具店を訪れた際にある機械が目に留まった。日本には無い樹木粉碎機だつた。山形は果樹県で、多くの剪定枝が出る。粉碎して肥料に利用できるのではないか。試行錯誤の結果、75年に日本初の樹木粉碎機が誕生、77年に「カルイチ

スター」の販売を始めた。が、雪国の気候や食べ物が合わなかつたのか、2年もしないうちにほとんどが四国に戻つてしまつた。

1939(昭和14)年 山形市に移転、山形発動機として業務開始  
1964(昭和39)年 キャナルポンプを開発  
1975(昭和50)年 日本初の樹木粉碎機を開発  
1990(平成2)年 社名をカルイに変更